

2011 第四回 台日原住民族研究論壇

第四回日台原住民族フォーラム

4th Taiwan-Japan Forum on Aboriginal Studies

文 | 蔡佳凌 (政治大學原住民族研究中心)

日本語翻譯 | 石村明子

圖 | 政治大學原住民族研究中心

2011年9月5日，第四屆台日原住民族研究論壇於政治大學召開，論壇共有10篇論文發表，分為原住民研究的「歷史與文獻」、「變遷與適應」與「台日原住民族整體研究分析」三大主題。台日學者舊雨新知共襄盛舉，對於發表主題討論熱烈，彼此研究交流的成果豐碩。

籌備論壇的經過

政大原民中心自2008年以來，已舉辦3次台日論壇，邀請台日雙方從事台灣原住民族研究的學者，透過論文發表展現研究實力，同時展望原住民族研究的趨勢，厚實原住民族研究的基礎。2008年第一屆台日論壇為台日學術交流的開展，因此重點在於創造台日雙方研究單位認識彼此的契機。2009年第二屆台日論壇則朝逢馬淵東一百年冥誕，因此論壇主題將原住民族研究

2011年9月5日，第4回日台原住民族研究フォーラムが政治大学で行われた。フォーラムでは、原住民研究の「歴史と文獻」、「変容と適応」、「日台における原住民族研究の全体的分析」の3大テーマの下、10の論文が発表された。再開と新しい出会いのなか、日台の研究者は大いに盛り上がり、発表テーマについても熱心な討論が行われ、研究の交流という大きな成果を挙げることができた。

フォーラムの準備経過

政治大学原住民族センターでは2008年からそれまで3度の日台フォーラムを行ってきた。日台双方から台湾原住民研究者を招き、論文発表によりその研究の實力を展開するとともに、原住民族研究の趨勢についても展望し、原住民族研究の基礎をしっかりと固めてきた。2008年の第1回日台フォーラムは日台の学



與會者專心聆聽發表的情形。

結合馬淵東一の學問，擴大移師台東縣舉辦，與會學者並在會後至池上鄉的馬淵東一墓致意。2010年第三屆台日論壇則回歸台日研究本身，更切入風災時事，探討原住民族研究走向。

2011年，在籌備第四屆台日論壇期間，對於本屆所應彰顯之主題特色，遲遲無法輕易下決定。因此在承辦初期，理應駕輕就熟的徵稿作業並未順利開展；且對於連續3屆會議的發表成果能否再精進化，甚至有製作期刊之構想。

而正當籌備委員苦思本屆主題時，3月11日，日本竟發生地震海嘯天災。雖在第一時間接獲日方學者平安訊息，籌備委員一方面安心，一方面也開始擔心日方學者是否能順利與會。所幸在笠原政治教授來台講學期間，與原民中心討論過後，仍希望能夠維持1年舉行1屆台日論壇，不希望中斷。因此商議過後，將本屆台日論壇的規模縮小，論文主題聚焦於本年度的研究成果展現，仍希冀透過台日雙方之研究成果發表，深化原住民族學術研究、呈現台灣與日本學界原住民族研究的最新動態與發展，而持續經營台灣原住民族學術交流的國際平台成為本屆台日論壇的首要目標。

術交流を推し進めることが目的であったため、その要は日台双方の研究機関がお互いに面識を持つためのきっかけを作ることにあった。2009年の第2回日台フォーラムはちょうど馬淵東一先生誕生100周年であったため、フォーラムの主題も原住民族研究と馬淵東一の学問を結びつけ、台東県に場所を移して開催した。また、出席した研究者たちはフォーラム終了後、池上郷に出向き馬淵東一の墓参りを行った。2010年の第3回日台フォーラムのテーマは日台での研究自体に戻り、台風災害や原住民族研究の動向についての議論が行われた。

2011年、第4回日台フォーラムの準備では、今回の特色となるテーマがなかなか決まらず、本来なら手馴れているはずの論稿集めも順調には進まなかった。一方で、連続3回行ってきた過去のフォーラムの成果をさらに高め、学術誌を発行するという構想もあった。

このように、ちょうど準備委員が思い悩んでいた矢先、3月11日、日本で地震・津波の天災が発生した。日本側からはさっそく無事だという知らせが届き、準備委員も安心する一方、日本からの研究者が参加できなくなるのではという心配もあった。幸い、笠原政治教授が台湾で教鞭をとっていらした最中に、原住民族センターで打ち合わせを行い、やはり



第一場論文發表「歷史與文獻」，左起為發言人李宜憲、發表人田中梓都美、主持人許雪姬、發表人鄭安晞、發表人大浜郁子。



第二場論文發表「變遷與適應」，左起為發言人陳文玲、主持人蔡中涵、發表人本多俊和、發表人林修澈。

原住民族的歷史與文獻

本次論壇共有10篇論文發表，日方4篇、台方6篇，共分為3場次主題的研究成果交流，日台雙方原住民族研究的專家學者，各自發表自身的研究近況。第一場次主題為「原住民族的歷史與文獻」，由中央研究院台灣史研究所許雪姬教授主持。政大民族學系鄭安晞博士透過分析台北地區日治時期隘勇線的推進，剖析其與蕃界之關係，主張日治時期隘勇線可對應於蕃界；關西大學文化交涉學專攻田中梓都美博士生解讀歐美對牡丹社事件的報導，談日本人對於台灣及台灣原住民認識的變化；琉球大學準教授大濱郁子，透過田野調查，觀察排灣族與客家人漢族關係，從嶄新角度論牡丹社事件過程中排灣族與客家人關係；民族學系李宜憲博士則探討日治時期東台灣原住民之貨幣使用及其影響。本場次發表學者透過文獻與實地調查，探究歷史事件經緯的縱深，並試圖使不同立場者進行對話。本場討論中，台灣原住民發展協會華阿財常務監事（排灣族）對於牡丹社事件中，討論客家人之參與備感新鮮，更提到2014年牡丹社事件滿140週年，可於沖繩舉辦國際討論會，意義甚大。

年に1度の日台フォーラムを停止させずに続けたいという結論が出た。そして、今回の日台フォーラムは規模を小さくし論文テーマは今年の研究成果の展開に絞ったうえで、日台双方の研究成果発表を通して原住民族の学術研究をさらに深め、台湾と日本の学界での原住民族研究の最新動向と発展について発表し、台湾原住民族研究の国際的な学術交流の場を持続するという事を今回の日台フォーラムの目標とした。

原住民族の歴史と文獻

今回のフォーラムでは、日本側4本、台湾側6本の合わせて10の論文の発表があり、3セッションでそれぞれの研究成果についての交流が行われた。日台双方の研究者は各自の最近の研究についてそれぞれ発表した。第1セッションのテーマは原住民研究の「歴史と文獻」で、中央研究院台湾史研究所の許雪姬教授が座長を務めた。そして、政治大学民族学科の鄭安晞博士が日本統治時代の台北地方の隘勇線前進の分析を通じて隘勇線と蕃界との関係を解析し、当時の隘勇線は蕃界と対応していると述べた。次に、関西大学文化交渉学専攻博士課程在籍の田中梓都美氏は牡丹社事件についての欧米の報道を読解し、台湾や台湾原



第三場論文發表「台日原住民族研究整體分析」，左起為發表人伊萬納威、主持人紙村徹、發言人山本芳美。

原住民族的變遷與適應

第二場次「原住民族的變遷與適應」，由台灣原住民教授學會蔡中涵理事長主持。日本放送大學本多俊和教授對於愛努族面臨全球化考驗，提出愛努族借鏡原住民族發展之可能；政治大學民族學系黃季平副教授，藉由探查賽夏族paSta'ay（巴斯達隘）祭典，探討無形文化資產的價值與傳承；政大原民中心林修澈主任，則透過實際深入調查2009年莫拉克風災災區——太麻里河流域部落，探討風災後，太麻里河流域部落遷村及民族結構變化；民族學系陳文玲助理教授聚焦嘉蘭（Ka'aruwan）部落，闡述風災重建過程中的社會階序變化。本場次主題緊扣災難與本族文化傳承的價值，討論期間，中央研究院民族學研究所黃智慧教授提供部落觀察實際經驗，使本場對談更加具體。

台日原住民族研究整體分析

第三場次主題為「台日原住民族研究整體分析」，由神戶市看護大學紙村徹準教授主持，都留文科大學山本芳美準教授藉由介紹日本學界2010年度所出版台灣原住民研究專書，展現日本學界研究成果；台灣則由政大民族學系

住民に対する日本人の認識の変化について述べた。また、琉球大学の浜郁子准教授はフィールドワークを通じてパイワン族と客家系漢族との関係を観察し、斬新な角度から牡丹社事件の経過における両者の関係について述べた。最後に政治大学民族学科の李宜憲博士が日本統治時代の東台湾における原住民の貨幣使用とその影響に関する考察について述べた。このセッションで発表者は文献と実地調査を経て歴史的事件の経緯の深さを探究し、当事者それぞれの立場からの対話を行おうとしていた。本セッションの討論は、台湾原住民發展協會の華阿財常務監事（パイワン族）が牡丹社事件に関して客家人の参与に言及したことは新鮮であり、また牡丹社事件満140周年の2014年には沖縄で国際会議が行いたいと考えており、その意義も非常に大きいと思う、と述べた。

原住民族の変容と適応

第2セッションは原住民族の「変容と適応」で、台湾原住民教授学会の蔡中涵理事長が座長を務めた。まず、放送大学の本多俊和教授が、アイヌ民族のグローバル化における試練と、アイヌ民族が他の先住民族の発展を鑑みることにしている可能性について述べた。続いて、政治大学民族学科の黄季平副教授が、サイシャット族のpaSta'ay（パスタアイ）の研究調査を通じて無形文化財の価値と伝承について述べた。その後、政治大学原住民族研究センターの林修澈センター長が、2009年モーラコット台風被災地である太麻里河流域の集落での実地調査による災害以降の太麻里河流域の集落移住と民族構造の変化について述べた。さらに政治大学民族学科の陳文玲助理教授が、嘉蘭（Ka'aruwan）集落に焦点を当てて、被災の復興過程における社会階層の変化について述べた。このセッションのテーマは災害や民族文化伝承の価値と強く結びついており、討論では中央研究院民族学研究所の黄智慧教授が村落観察の実地経験を述べ、話題をさらに具体化させた。

博士候選人伊萬納威統整台灣30年（1981-2010）原住民族研究成果，展現台灣原住民研究發展趨勢與走向。

本次會議，台灣原住民相關研究學者熱情參與。台日雙方透過與會彼此交流意見，會中本多俊和教授更提出往後可以嘗試台日共同研究之模式，對於往後台日雙方研究發表相信會更有所助益。

思考合作研究及研究主題

笠原政治及許雪姬、蔡中涵等多位教授皆對於本論壇能持續舉辦給予肯定及贊揚。本論壇連續4年提供台灣原住民族學術交流的國際平台，台日雙方學者皆可藉由論壇呈現及關注台灣與日本學界原住民族研究的最新動態與發展。維持一年一度的常態性論壇模式已成台日雙方共識，而後續台日論壇是否可以開展合作研究，或是設定研究主題，則是籌備委員會應思考的重點。台日雙方皆對往後台日論壇之舉辦抱以厚望，互許來年之約。

論壇幕後 參與籌備的心路歷程

筆者就讀政大民族學系碩士班時，自首屆台日論壇即開始接觸籌備事務，感謝原民中心的老師們給我機會，歷經四屆的台日論壇籌辦，過程中總是忙碌，但會議結束時總會有滿滿的充實感與成就感。

第一屆台日論壇，當時從旁協助出納工作，完成交辦事務，就開始期待點心、晚宴時間，看到教授們在會議間認真討論與晚宴時間輕鬆對談的反差，也覺得特別有趣。第二屆台日論壇擴大舉行，工作角色也轉換為主要承辦人，從學期間讀書會便開始參與，成為長期的工作抗戰。申請補助、議程規劃、議事聯絡，全面籌備會議，雖然辛苦，但從中收穫最多，因為藉由此次籌備論壇的磨練，對於籌備事務開始能兼具全貌、細微的觀察，進而順利執行。

日台における原住民族研究の全体的分析

第3セッションのテーマは「日台における原住民族研究の全体的分析」であり、神戸市看護大学の紙村徹准教授が座長を務めた。まず、都留文科大学の山本芳美准教授が日本の学界で2010年に出版された台湾原住民研究の専門書の紹介を通じて、日本の学界の研究成果を述べた。台湾側は政治大学民族学科博士候補生のイワン・ナウィ氏が台湾における過去30年間（1981-2010）の原住民族研究の成果についてまとめ、台湾原住民研究発展の趨勢と動向について述べた。

台湾原住民関係の研究者が熱心に参加した今回の会議では、日台双方がお互いに意見を出し合った。また、本多俊和教授は日台の共同研究が日台双方の研究発表にとって更なる効果をもたらすのではないかと提言した。

共同研究と研究テーマを考える

笠原政治教授、許雪姬教授、蔡中涵教授など多くの研究者から、本フォーラムが継続して開催されたことに対して、良い評価をいただいた。本フォーラムは国際的な台湾原住民族研究学术交流の場を4年間継続して提供した。また、日台双方の研究者は台湾と日本の学界における原住民族研究の最新の動向と発展について、フォーラムを通じて表明し、注目することができる。年に1度の恒例のフォーラムという形式は日台双方の共通認識となっているが、今後フォーラムで共同研究を行っていくか、あるいは研究テーマを設定するかなどは準備委員会の構想の要ともなっている。そして日台双方とも皆、今後の日台フォーラムに大いに希望を抱いており、翌年の実施も約束されているといえるだろう。

フォーラムの舞台裏 参加と準備の道のり

筆者は政治大学民族学科修士課程に在学中に、第1回日台フォーラムから準備実務に関わってきたが、そのチャンスを与えてくれた先生たちにも感謝したい。4度の日台フォーラム



與會者於會後合影，第四屆台日論壇圓滿落幕。

碩士班畢業後，成為專任助理，籌備第三屆台日論壇成為首要任務。有了前次的經驗，行政事務能都穩紮穩打地完成，卻在催稿上遇到極大困難，假日加班等稿、遲至最後一刻才送稿印刷的經驗，這樣的緊張感令人難以忘懷，但也教會了我更慎重地評估工作進度。第四屆台日論壇，在前3屆的經驗之下，對於行政業務的處理並無太大問題，不過召開籌備會議期間，籌備委員們對於主題無法敲定的憂慮，也促使我開始了解，台日論壇的舉辦必須立基於有目標、有意義，才不會流於形式。

四屆台日論壇籌備過程，處處都可見到我這個小助理的成長歷程。唯一美中不足的地方就是日文會話沒有進步，雖然是面對見過好幾次面的日本教授，開場白卻還是「はじめまして……（初次見面……）」，接下來希望能好好歷練日文，若在籌備過程中能派上用場，相信會得到更高的成就感！◆

準備・実行は忙しかったが、終了後はいつも充実感と達成感に満たされていた。

第1回日台フォーラムでは支出関係の事務を務め、終了後はコーヒープレイクや交流会を楽しみにしていたが、会議のときは真面目に討論し、一方の交流会では気軽に話し合う先生方の様子の差異にも面白さを感じた。第2回目の日台フォーラムは規模が大きくなった上、業務上も主要な実行メンバーとして学期中の勉強会から参加し、長期戦となった。補助金申請、会議企画、連絡事務、準備委員全体会議など、大変ではあった

が収穫も多く、この回の準備で磨きがかかり、準備実務全体が良く見え、順調に実行できるようになってきたと思う。

修士課程卒業後はセンター専任の助手となったが、初仕事が第3回フォーラムの準備だった。前回の経験を踏まえて運営事務は確実に終わることができたが、論文の催促では大きな困難に直面した。休日に残業して論文を待ち、最後の最後によく印刷に持ち込むという経験をした。このような緊張感は忘れようにも忘れられない一方で、仕事の進捗は慎重に見積もらなければならないことを学んだ。第4回フォーラムでは、前の3回の経験があり、運営業務においては何ら問題はなかったが、準備会議にあたって準備委員がテーマが決定できないことを心配していた。そのことによって、日台フォーラムは目標と意義に基づいてこそ形式化しないということを理解した。

4回にわたる日台フォーラムの準備過程において、微力な助手としての自分の成長をいたるところで眺めることができた。唯一残念なのは日本語が上手にならないことで、何度もお会いしている日本の先生方に話しかけるときに「はじめまして……」という始末。これからは日本語も十分に練習したい。準備で日本語を生かせれば、より一層の達成感が得られるだろう。◆

